11月混迷を深める世相 この秋 気になったインターネット・新聞より ニュース拾い読み

【1】神戸新聞 「正平調」・より眺めた世相 11月 （掲載順位不同 お許しください）

【11.3. & 11.6. 高市首相誕生 立ち居振る舞いがネットも賑わって】

正平調

ネットの投稿を読んでいると、その視覚的な表現力に「うまいなぁ」と感心することがある。今回もそうだった。それは「ぴょんぴょんイェーイ」、または「ウキウキぴょんぴょん」◆高市首相が来日中のトランプ米大統領と横須賀の米軍基地を視察した。肩を抱き寄せられて「日本の歴史上、初の女性首相だ」と紹介されると、満面の笑みで右腕を突き上げ、何度も跳びはねて声援に応えた◆「もう相手の懐に入っている」「さすが高市さん」。その人柄と〝コミュ力〟をたたえる声もあれば、「威厳がない」と批判する声もあって、ネットで論争になっている◆米軍といえば最近、トランプ大統領の側近、ヘグセス国防長官が世界中から軍幹部を集め、こんな演説をした。軍には多様性や公平性の行き過ぎた追求があった。だから今後は「最高水準の男の基準」を求める。太った将軍や提督は絶対に認めないと◆男性らしさ、マッチョへの回帰だろうか。「戦士の気風」を回復するため、国防総省を「戦争省」とも呼ぶ、と鼻息が荒かった◆そんな米軍の大きな変化を日本の首相はご存じだろう。日本の中心部にある米軍基地の、それも原子力空母の艦上での振る舞いである。チアリーダーのような「ぴょんぴょん」は無邪気すぎる。 2025・11・3

高市首相誕生、また、ネットかと。ネット受けよりも、じっくりと事に向き合ってほしい。

１１月６日の正平調にも違った意味で、期待を込めて言葉が高市首相に贈られていた

【2025.11.6. 女性総理誕生に NHK 朝ドラのタイトルの言葉「虎に翼を送る】

正平調

「大きくなったら船長になりたい」と夢を語る少女を大人たちが諭す。「女の子には無理だよ」。えっ、なぜ？◆船長に、と願った少女は後にアイスランド初の女性大統領となった。次世代を担う彼女たちの未来を切り開き、アイスランドを「ジェンダー平等の先進国」へと導いたのが、1975年10月の「女性の休日」だ◆国内の9割の女性が参加したストライキ運動である。家庭やオフィスで、貨物船や農場で一斉に仕事を休み女性の存在をアピールした。その様子と過程を描いた映画が神戸の元町映画館などで公開中だ◆見終わってキーワードとして浮かぶのは「連帯」、そして「折り合い」だろうか。女性同士で、さらに男性たちと何度も話し合う。大事なのは必ず実現すること◆思い起こす日本のドラマがある。性別や信条などによる差別を禁じた憲法14条をテーマとし、「はて？」のセリフが話題となった「虎に翼」だ。脚本家の吉田恵里香さんは語る。「困っている人々が（対立して）殴り合うのでなく、手をつなぎ差別という大きな敵と闘う感覚を持ってもらえたら」◆日本でも女性総理が、ニューヨークではイスラム教徒の市長が誕生した。連帯の成果かどうかはともかく、次世代の未来を切り開く出来事と刻みたい。 2025・11・6

NHK 朝ドラのタイトル「虎に翼」。女性総理誕生を「次世代の未来を切り開く出来事」「翼を持つ虎」になれと。

言葉の重さも難が得ねば・・・・・と。さあ　厳しい時代の中での高市首相。刹那仕事にせぬように

【2025.11.19. きのう知らなかったことを知る喜び】

正平調

川崎洋さんの詩集を開いて、「いま始まる新しいいま」の一節をひく。〈きのう知らなかったことを／きょう知る喜び／きのうは気がつかなかったけど／きょう見えてくるものがある〉◆いままで何を知らなかったかは、それを知るまで分からない。このほど開幕した聴覚障害者の国際スポーツ大会「東京デフリンピック」を伝える記事や映像に、〈きのう知らなかったこと〉を日々教わっている◆聞こえない、聞こえにくい選手たちの躍動の合間、映し出される観客席にも初めて見る光景がある。サインエールは手話をベースにした目で見て分かる応援方法という◆例えば、チャンスのときに顔の横で両手をひらひらと振り、前に突き出せば「行け」の意味になる。カラフルな手袋をはめて盛り上げることもあるようで、客席が一体となり届けるサインは選手を力づけている◆空港やホテルは筆談の用意をしたり、事前に手話を学んだりして選手を迎えた。それも大事なエールだろう。願わくば一時で終わらず〈きのうは気がつかなかった〉ことにきょうは気づく社会につながるといい◆川崎さんの詩にはある。〈わたしはさっきのわたしではない／そしてあなたも〉。デフリンピックの後にたくさんの人がそう言えたら、もっといい。 2025・11・19

「私はさっきのわたしではない/そして　あなたも」の言葉に応援のエール!!を送る

【2025.11.28. 言葉を燃やすことは出来ますか 】

正平調

少女は聞いた。「言葉を燃やすことは出来ますか」。焼却炉のおじさんが答えた。「かたちがないものは、燃やすことが出来ないんです」。西加奈子さんの短編「燃やす」の一節である◆発しなければよかったという言葉が、ある。自責し、わびるのならまだしも気づかずに誰かを苦しめたこともたぶん、ある。とはいえど、不快な言葉を一刻も早く燃やして消したいのは受け手のほうに違いない◆福井県の杉本達治知事が辞職の意向を表明した。複数の職員に送ったメッセージがセクハラに当たることを認識した、というのが理由である。事案はなお調査中という◆「雑談の延長で、ざっくばらんのつもりだった」「軽口のつもりだった」と会見で釈明している。雑談なんだし性的な発言もかまわないよね。そう聞こえる。平素どのような雑談をされているのか、気にもなる◆自分はその「雑談」相手か―。人格と尊厳を軽くみられた悔しい気持ちとおぞましい文面の記憶は受け手の心に張り付いて離れまい。燃やして消し去ることもできない◆先日、タレントの謝罪会見がテレビで流れていた。その人は「立場と環境にあぐらをかいていた」と述べていた。ざっくばらん。軽口。立場。環境。あぐら。ひとつひとつを重い教訓とする。 2025.11.28

仲間内　和の中での思いもかけない言葉が、相手にグサッと突き刺さる。

ざっくばらん　軽口　立場　環境　あぐら　一つ一つを重い教訓に　心せねばと

【2025.11.26.青い空へと伸び行く麦 新大関 安青錦と祖国の明日にどうぞ幸あれ 】

正平調

ウクライナ国旗は青と黄の2色からなる。どこまでも広がる青い空と豊かな小麦畑を表すといわれるが、いまはその青が海の色にも見えて悲しい◆〈なみだは／にんげんの作る一ばん小さな海です〉（「寺山修司名言集」より）。そう、戦渦のただ中を生きる人たちを思うとき、あの国旗の青が涙の海に見えるのだ。ミサイルのない平和な空はまだ戻らない◆祖国ウクライナの色をしこ名に織り込んだその人はまだ21歳、枕をぬらした夜を何度越えてきたろう。遠方の友を頼って神戸に避難してから3年半、初の賜杯を抱いた大相撲、安青錦（あおにしき）の大関昇進がきょう決まる◆優勝決定戦を制した後、号泣する付け人と抱き合い、目頭を押さえた。電話で報告を受けたドイツに暮らす両親も泣いていたという。そう聞けば不思議、国旗の青までがうれし涙を満たした海のように光を放つ◆もう一方の色というまぶしい小麦畑に中島みゆきさんの「麦の唄」を重ねる。〈伝えておくれ故郷へ　ここで生きてゆくと／麦は泣き　麦は咲き　明日へ育ってゆく―◆青い空へと伸びゆく麦。新大関と祖国の明日にどうぞ幸あれ。 2025.11.26

安青錦の大関昇進　おめでとう。つらく厳しい環境の中での強い精神力にも感服する。

大国の横暴ぶりに振り回されるウクライナの悲惨な状況を聞くにつけ、無力さを感じる日々です。

今、急速に拡大する核抑止論。平和憲法の原則すら守れぬ日本。明日は我が身があちこちに顔を出す。

“ 戦争・武器では平和は得られない ” と思う。厳しい中で、祖国への思いを胸に安青錦 ガンバレ!!

【2025.11.15. 世界で声援を浴びる大谷梢平選手　満票で MVP】

正平調

1995年の記憶はほとんど阪神・淡路大震災に占められているが、スポーツの話題には随分と救われた。あの1年の流行語には、プロ野球オリックスのスローガンだった「がんばろうKOBE」とともに「NOMO」がある◆ひとり海を渡り、米大リーグの門をたたいた野茂英雄投手はドジャースで活躍し、同年の新人王を獲得している。当時のニューヨーク・タイムズは伝えた。「野茂英雄は米国の野球界に対する最高の贈り物だ」◆NOMOフィーバーから30年、米球界の光景は様変わりし、日本人選手は当たり前になったどころか、その頂点に立ち続ける人もいる。また満票という。ドジャースの大谷翔平選手が4度目のMVPに選ばれた◆日本人としての活躍がたたえられたとき、野茂さんは言ったという。「僕は野球人ですから」。グラウンドでは国籍など関係ない、と。同じ思いに違いない大谷選手の野球人としての偉業を、心からたたえたい◆かの国の第26代大統領、セオドア・ルーズベルトの言葉にある。「目を星に向け、足を地につけよ」。夢という北極星を闇夜の道しるべとし、地図なき荒野を一歩ずつ切り開いたその先に輝く地平は待っている◆その目は今どんな星を見ているか、「二刀流」の旅は終わらない。 2025.11.15

ここにも世界平和に貢献する日本の若者がいる。大谷梢平選手

先頭に立って躍動する中、あの愛くるしい笑顔にどれだけ、希望と勇気をもらったことかと。

この秋の正平調には　混乱の中にある世界・日本の現状に、無力感漂う世相への警鐘と

そんな中で暮らす人々への応援歌が何度も掲載されています。

今　自分の身に立ち返って答えを探す。先人たちの声にも耳を傾けて・・・・・

【2025.11.12.】トランプの大国主義の横暴に振り回される世界　道は開けるだろうか…・。

正平調

詩人の大岡信さんが編んだ「折々のうた」から。「ふと思うことありて蟻ひき返す」（橋閒石）。方向を転じたアリが何を思ったのかは分からぬが、この神戸ゆかりの俳人の句に浮かぶ光景が一つ◆皆で「目的地」に向かっていたら一匹の大きなアリがくるっと背を向ける。目的地は脱炭素社会、大きなアリは米国。引き返すことは、化石燃料頼みの社会へと戻ることを意味する◆トランプ大統領は国連で演説した。「温暖化は起きていない。気候変動対策は史上最大の詐欺だ」。だが世界各国は足並みが乱れつつも脱炭素の方を見ている。新素材の開発、技術革新。いらぬお世話だろうが、取り残されぬうちに戻っては◆世界最大の熱帯雨林があるアマゾンの街で国連の対策会議「COP30」が始まった。議長国ブラジルや海面上昇に脅かされる国々の「自国ではなく地球規模の視点で、真剣な取り組みを」の声は切実だ◆世界はつながっている。（カムチャッカの若者がきりんの夢を見ているとき　メキシコの娘は朝もやの中でバスを待っている）。谷川俊太郎さんの詩「朝のリレー」にあるように◆（ぼくらは朝をリレーするのだ（中略）そうしていわば交替で地球を守る）。新たな社会の夜明けへ、地球を守るリレーに連なる。　2025.11.12

【2025.11.11.】いわれのない誹謗中傷

寅さんは　ハッと感じて、その相手を探しに行く　この相手を思う心の大切さ

正平調

寅次郎が印刷工場の社長と演じる派手なけんかは毎度の見せ場だが、泣きながら表に出て行く社長の様子がいつもと違う。見ていたおいちゃんが言った。「たった一つの言葉が人間を死に追いやることだってあるんだからなあ」◆映画「男はつらいよ　浪花の恋の寅次郎」（1981年）である。寅さんはハッとなって社長を捜しに行くのだが、このところはそのシーンをことあるごとに思い出す◆誹謗中傷という語をニュースでよく耳にし、そのニュースが痛ましい悲劇として伝えられることが増えたのはいつごろからだろう。おいちゃんがのんきに語っていたせりふはもう、昔と同じようには聞こえない◆政治団体「NHKから国民を守る党」党首の立花孝志氏が名誉毀損の疑いで兵庫県警に逮捕された。亡くなった元兵庫県議に関するうその情報を広め、死去後の発言も含めて名誉を傷つけた疑いがもたれている◆捜査は捜査としてその行方を見守っていくとしても、伝えられる容疑者の言葉やふるまいに元県議や家族が苦しめられたであろうことは容易に想像できる。これからも、に違いない。それだけでも「罪」は重い◆発した言葉が取り返しのつかぬことも招くんだと、何度も諭さねばならない悲しみといらだちはいつまで。　2025.11.11

トランプの影響か　日本にも選挙ジャックした人物とそれに呼応した人の群れが現れた。
本当に SNS や拡散させた場の提供には罪がないのか…
「相手を思んばかる心ののない世界」の末期的症状が、日本の社会にも　ここかしこ
屁理屈はもう沢山　あかんことはあかんと司法はしっかり正してほしいなぁ

【2】神戸新聞＜汀にて＞　鷲田清一　木漏れ日のように密室の関係ほどく力を

神戸新聞　2025/10/29.　汀にて　より、整理転載

《ひとは、一人が別の一人の面倒をそっくりみるようにはできていません》

ずいぶん前のことになるが、大阪大学の大学院で哲学を学ぶ看護師が口にしたことばだ。ケアする人とされる人、ケアがそういう二人の閉じた関係としてあるのがそもそも歪なことなのだというこの指摘は今日まで、わたしがケアといういとなみを考えるときの基本にある。

ケアといういとなみが、ケアする人とされる人、たとえば家族内の二人だけに閉じているとき、その関係は往々にして煮詰まる。ぎくしゃくしたやりとりが重なり、もがけばもがくほど空気は息苦しいものになって、やがて抜き差しならないフェイズに入る。

そんなときに、たまたま電話機が音を立てる、だれかが通りかかる、あるいはだれかの突然の来訪など予測もしない出来事が起こる。すると、もつれた関係がいったん凍結され、さらにその後の展開によってはわずかながらもほどけるということも起こる…。

■　偶然が噛みあう

介護をはじめとするケアの関係には、そのように偶然の力によって局面が変わるということがしばしば起こる。ケアには、主体間の関係というより以上に、場の出来事という面があるからだろう。

だからケアの現場では、日頃からそのような偶発事が起こりやすい空気をつくっておくという工夫がなされる。たとえ

ばあるホスピスのベテランナースは、きょうのやりとりはしんどくなりそうだなと予感するとき、
「１５分くらい経ったころ、いちどケータイ鳴らしてね」と同僚に頼むというふうに、
いってみれば偶然をわざと組み込んでおくと聞いたことがある。
　そういう工夫、あるいは目配りが日頃からできていればいいが、しかし、偶然は計算外で起こるものだし、また汲々のスタッフ本人にそうした余裕を求めるのは酷であろう。
ケアは「世話」や「配慮」をはじめとして「してあげる」もののように記述されたりするが、むしろ思わぬ偶然に助けられるという面がかならずあるようにおもう。

　東京工業大学（現・東京科学大学）の未来の人類研究センターが刊行している『テクノロジーに利他はあるのか？』という冊子を読んでいて、ある記述に眼が止まった。
美学者の伊藤亜紗さんが、「与える」という行為がある意図をもってその結果をコントロールしようとするのに対し、「漏れる」というのは　結果に無頓着なのに、全体としてはどこか噛（か）みあい、うまくいく、そういう事態がとても大事だというのだ。
　「漏れる」といえばふつう、「漏電」に「漏水」、さらに「情報漏れ」というふうにネガティヴに語られるけれども、おたがいの情報をふだんから一定度漏れ出させておかないと、災害などの緊急時にはかえって危険だというのだ。
ある程度の情報漏れがあるから、どこをまっ先にケアしたらいいか、とっさにわかる。
「漏れてしまうということが、社会性を生み出す」というのである。
　あらためて、場が備えておくべき力というものをおもう。

■相対化する眼

　かつて町なかでは、いろんな暮らし、いろんな生業が、見るともなく見えていた。
とりわけ子どもには、その見えているということが重要な意味をもっていた。
じぶんを、そしてじぶんの家族を、これがすべてと思うのではなく、つねに多くのなかの一つのありようとして相対化する眼がそのことで養われていた。だから、たとえば家族内の暴力事件の報道にふれても、それをいきなり一般化するような性急さを制限できていた。
　現代、ほとんどの家族が鉄の扉で隔てられた密室に住まうようになって、見るともなく見えるそんな地域とその住民たちの暮らしにふれることが少なくなった。だから「普通」という感覚をもつのがかんたんなことではなくなった。代わりに、テレビやＳＮＳでふれる社会情報にじかに感情的な反応をするようになった。

そういう反応がさらにメディアでタレントやインフルエンサーによって増幅され、根拠なしに「言い切る」ような発言が巷（ちまた）にあふれもする。
　突拍子もないことを言いだすとおもわれるかもしれないが、わたしがいま、テレビ（といっても観る人は減る一方だが）の番組制作に期待したいのは、ドキュメンタリーだ。
それも歴史的な大事件ではなく、国内外のさまざまな地域での日々の暮らしを取材したもの。
バラエティーよりもむしろそうしたドキュメンタリーの映像が、かつて町なかを歩くときに見るともなく眼に入ってきたように、いま密室の部屋のなかでもＢＧＭのように眼と耳に入ってきたらいいなとおもう。
それこそ木漏れ日のように。

鷲田清一先生の「木漏れ日のように密室の関係ほどく力を」は実にわかりやすく頭に入り、うれしく拝読。
技術屋の私には「余裕しろ」「無駄は無駄ならず」「限界設計」等の言葉に通じる話。要は今の世、ぎすぎすしなさんなと言われていると。　また、社会性を養う観察眼「相対化する眼」の必要性も何かにつけて大切。
「木漏れ日のように」??? 何だろうと思いましたが、　うれしく、そうでありたいなあと。
「TV のドキュメンタリー」現場をありのままを見れると私も好き。それが一人一人の観察眼の醸成に
今月の正平調にもあった「相手を思う心」にも通じて、思いがけずも色々なことが解けました。
ありがとうございました。でも「相手を思う心」ははやりの「忖度」とは別物です。

2025.11 月 汀にてを読んで　　From Kobe　Mutsu

◆ 北川進氏ノーベル化学賞 坂口志文氏 ノーベル生理・医学章受賞　両氏、日本の科学技術力の将来を憂う

ノーベル賞「人生で特別な日」

坂口さん、北川さん 授賞式

ノーベル賞授賞式で、メダルと賞状を授与された㊨生理学・医学賞の坂口志文・大阪大特任教授と㊧化学賞の北川進・京都大特別教授＝いずれも10日、ストックホルムのコンサートホール（共同）

【ストックホルム共同】ノーベル賞の授賞式が10日夕（日本時間11日未明）、ストックホルムのコンサートホールで開かれた。スウェーデンのカール16世グスタフ国王が、生理学・医学賞の坂口志文大阪大特任教授（74）と化学賞の北川進京都大特別教授（74）に最高の栄誉を示すメダルと賞状を授与した。

（3、22面に関連記事）

両氏はそれぞれ国王と握手、ファンファーレが鳴り響いた。家族や共同研究者らを含め1500人以上が見守った。終了後、坂口氏は「本当に光栄で、人生で特別な日になると思います。（メダルは）結構重たい」とにこやかに話した。北川氏は一夜明けた11日午後の記者会見で「ノーベル賞をもらったんだなという実感が湧いた」と述べた。

両氏は授賞式後、近くの市庁舎で催された晩さん会にも出席。王族やノーベル財団関係者ら約1300人と4時間にわたり夕食や音楽を楽しんだ。

一夜明けの会見には両氏ともメダルを携えて出席し、和やかな表情。北川氏は国王からメダルを受け取った瞬間について「落とさないか心配していた」と手ぶりを交えて笑顔で振り返った。

坂口氏は過剰な免疫反応を抑える「制御性T細胞」を発見し、自己免疫疾患やがんなどの治療に新たな道を開いた。会見で、次は（研究成果を）人でどこまで応用できるか。受賞で社会的な関心や理解が深まることを期待している」と述べた。

北川氏は多数の微小な穴の開いた新材料「金属有機構造体（MOF）」を開発。用途に応じて穴の構造を変え、温室効果ガスのメタンなど気体の捕集、貯蔵に利用できるとして評価された。

日本の科学技術力 将来憂う

坂口氏 研究費貧弱「若い人来なくなる」
北川氏 基礎研究「長期的な支援が必要」

ノーベル賞授賞式を前に、写真に納まる北川進・京都大特別教授（左）と坂口志文・大阪大特任教授＝10日、ストックホルム（京都大提供）

ノーベル賞の2氏

今年のノーベル賞は生理学・医学と化学の2分野で坂口志文大阪大特任教授（74）と北川進京都大特別教授（74）がそれぞれ受賞し、注目が集まった。ただ近年は日本の科学技術力の低迷が指摘されており、将来には暗雲が漂う。高市早苗政権は、研究力向上を目指し基礎研究への投資拡充の検討を始めたが、どれだけ増額できるかは未知数。物価上昇もあり、苦境に立たされた現場に追い風となるか読めない。

（1面参照）

「日本の基礎研究へのサポートは国内総生産（GDP）の割に小さい。基礎科学は形になるまでに時間がかかるかもしれないので、若い人たちがサイエンスの分野に入ってこなくなる」。スウェーデン・ストックホルムのノーベルウイーク公式会見後、坂口氏は危機感を募らせた。

文部科学省の科学技術・学術政策研究所の「科学技術指標2025」によると、企業も含めた日本全体の研究開発費は米国、中国に次ぐ3位。近年の日本の伸びは欧米や中国と比べて小さく、特に大学の研究開発費は7位で、大きく後退している。

坂口、北川両氏は、受賞決定後の記者会見や講演などで、研究費や研究時間の確保、若手支援といった課題に触れ、政府の協力を求めてきた。公式会見で北川氏は「基礎研究では長期的な資金提供が適切だ」と訴えた。

物価高、現場苦境

一方、物価上昇の影響は深刻だ。物理実験によく使われるヘリウムの単価は2010年に比べ24年は7・2倍に、診断用・研究用試薬類は同4・6倍に上った。同研究所は「大学などで実質的に研究開発に使用できる費用は減少しており、価格変動は研究の持続可能性に大きな影響を与えている」と懸念を示した。

同指標は、21～23年に多く引用され注目度が高い自然科学の論文数では主要国のうち日本は13位だったと紹介。01～03年は4位、11～13年はほぼ横ばいが続いている。

遅まきながら状況改善に向けた動きも見えてきた。政府は11月の総合経済対策で、物価上昇を踏まえて国立大の基盤的経費確保による基礎研究の支援などを進める方針を掲げた。さらに高市首相は政府の会議で、国立大に配分される運営費交付金や基礎研究への投資の大幅な拡充を検討するよう関係閣僚に指示した。

ノーベルウイーク中、ノーベル財団関係者から日本の基礎研究への将来を憂える声が相次いだ。化学賞選考委員長のハイナー・リンケ氏は「日本のように若者が減れば科学分野への参入者も減るとの懸念は理解できる。成長は基礎研究から生まれ、北川氏の成果がその好例だ」と話す。

生理学・医学賞選考委員長のオッレ・シェンベ氏は「リスクの高い長期的な研究から大きな成果が生まれる。日本政府は短期的でなく長期的な支援にかじを切るべきだ」と強調した。（東京、ストックホルム共同）

2025.12.11.神戸新聞朝刊　より、抜き書き整理